
ジヴリールの書架 断章集

王蠱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジヴリールの書架 断章集

【Nコード】

N1850Q

【作者名】

王蠱

【あらすじ】

不可思議はどんな時でも身近なところに潜んでいる。

”蒼の読姫”と呼ばれた少女が拾い集めるのは

そんな現代の怪異が紡ぐ物語たち・・・

保存法 〵 (Refrain) 〵 (前書き)

「ダンタリアンの書架」の設定を基にした

現代が舞台の短編集・・・にしていく予定です。

キャラなどはほとんどオリジナルしか出ませんが

原作とのつながりをおわせるエピソードも入れるつもりです。

また思いついたら書いていく、というスタンスでいくので

更新は不定期になると思います。

保存法　　（Refrain）

男がその本を見つけたのは通いなれた骨董屋だった。最近仕入れた古い書架に

入っていたというその本の題名は『タイトル不変の書』。外側から分かったのは

書名だけで作者や出版元はどこにも記されていない。中をパラパラとめくってみた

その中身は漢字とカタカナでびっしりと埋め尽くされ、とてもではないが立ち読みできるような文章量ではない。なにやら惹かれるものを感じた男はその本を購入すると店を出た。その時、男はどこか奇妙な印象を与える光景に出合った。骨董屋と横断歩道を挟んだちょうど向かい側。信号待ちしているらしき少女。歳の頃14、5といったところだろう

彼女は蒼い着物を纏まとい信号が変わるのを待っているようだった。やがて歩行者用の信号機が赤から青に変わり男は歩きだす。向かいにいた少女も少し遅れてこちらに

歩いてくる。横断歩道のほぼ真ん中、二人がすれ違う瞬間。

「・・・また逢あわないことを祈るわ」

「えっ？」

呟かれた言葉に振り返った男にもしかし蒼衣の少女は顔を見せることも

返事することもせず、そのまま男がたった今までいた骨董屋へと吸い込まれるように入っていった。

男はある企業の有能な研究員だった。彼の所属する会社はこの国で

もかなりの大企業で

あり、当然ながら彼の仕事也多忙を極めた。男は食う間も寝る間も惜しんで研究に

明け暮れ、会社に多大な貢献をしていた。だがその代わり、彼は自分の時間をほとんど失っていた。

束の間の休息时间。デスクに突っ伏した彼の目に映ったのは一冊の古書。それはもう

何年前のことか、まだまだ暇を持て余していた時期に手に入れたもの。買った方がいいが

なぜか今までその存在を失念していたそれを手に取った彼は何気ない手つきでページを

めくっていき

「これは・・・」

ある文章を捉えた瞬間、過労で虚ろ気だった彼の目は絶対に手に入るはずのない希望を

見つけたように濁った輝きを放った。

それから数日後、男の所属する研究室では少しかし不思議なことが起こっていた。

研究員用の冷蔵庫にしまわれていた肉や野菜などの食品。常なら食べかけで

放置されたまましなびていくことがほとんどのそれらがある日を境に新鮮なまま

変化しなくなったのだ。最初にこれに気付いた職員の手により簡単な原因調査が

行われたが事実ははっきりせず、結局人体にも無害らしいということとでそのまま

この状況は“理由は分からないがとりあえず良い変化”という認識で処理された。

人知れず行つた“実験”の予想以上の成功に男は内心笑いが止まらなかつた。

彼が読み解き食材に使用したのは『不変の書』に記された知識。あらゆるものを

半永久的に保存するその秘儀を施された食品は腐敗や乾燥の影響を受けることもない。

手にした禁断の叡智が事実であることを確認した男はさつそく“本当の目的”を実行に移すことにした。

「これでよし、っと」

久しぶりに戻ってきた自宅は予想以上に汚れてしまっていたが、今の彼にとって

そんなことは本当にどうでもよいことではしなかつた。薄くホコリが積もった畳の上に

カラーテープで形作られたのは無数の円と無数の三角形で構成された魔法陣。満足げな

表情でその中央に立つた男は古書の文面を読み上げた。自らを永遠の時を生きる存在へと変じるために。

男がその本を見つけたのは通いなれた骨董屋だつた。最近仕入れた古い書架に

入っていたというその本の題名は『タイトル不変の書』。中をパラパラとめくってみた

その中身は漢字とカタカナでびっしりと埋め尽くされ、とてもではないが

立ち読みできるような文章量ではない。なにやら惹かれるものを感じた男はその本を

購入すると店を出た。その時、男はどこか奇妙な印象を与える光景に出合った。骨董屋と横断歩道を挟んだちょうど向かい側。信号待ちしているらしき少女。歳の頃14、5と

いったところだろう彼女は蒼い着物を纏まとい信号が変わるのを待っているようだった。やがて歩行者用の信号機が赤から青に変わり男は歩きだす。向かいにいた少女も

少し遅れてこちらに歩いてくる。横断歩道のほぼ真ん中、二人がすれ違う瞬間。

「・・・また逢あわないことを祈るわ」

「えっ？」

呟かれた言葉に振り返った男にもしかし蒼衣の少女は顔を見せることも返事することも

せず、そのまま男がたった今までいた骨董屋へと吸い込まれるように入ってしまった。

「・・・今の子・・・なんだか前にも会ったことがあるような・・・？」

首をかしげながらも本を抱えた男はそのまま歩いていった。

「『不変の書』、って知ってるかしら？」

窓越しに外の夕暮れの光景を眺めながら蒼い着物を着た少女が言う。

「聞いたことがあるよ。この世のあらゆるものを永遠にそのままの姿で留めておくことのできる幻書・・・だったかな？」

窓枠によりかかった少女を眺めていた青年は自身の記憶を確かめるように

ゆっくりとした口調で返す。

「是シ。そこに記された秘術を施された存在は生物・無生物、有機・無機の区別なく等しく“永遠の今”に囚われるの。その“固定された時間”の中でその存在の性質が大きく変わらない限り、ね」

「？言ってる意味がよく分からないんだけど」

そんな青年の返事に少女が見せたのは微笑みと悲哀が入り混じったような不思議な表情で。

「“不変の書”の原理の本質はすごく簡単なのよ。“切り取られた時間”を永遠に繰り返す。例えばAという物体に“切り取り時間”1分という設定でこの術を施すとするわね。

そうするとこのAは1分という周期で1分前の状態に完全にリセットされるの。

もちろんその復元にも限界はあるけど」

「・・・多分分かったよ」

それで？今度は青年が少女に問いかける。

「なんで急にそんな話を？」

射し込む夕日が眩しいのか、それとも何か別の理由からか。少女は目を細め

遠くを見るように窓に近づいた。空の大部分はもう夕焼けの朱色から夜の深い紺に染まりかけている。

「なんとなく・・・かしら？ううん、やっぱり違うわ」

そう言って少女は青年を振り返る。深い海のような、澄んだ空のような美しい蒼の着物。腰の長さまで伸ばされた黒髪は艶やかで、不自然なくらいに整った顔立ちと

相まったその立ち姿はどこか日本人形を彷彿とさせる。その美しい唇から。

「あなたはあんな馬鹿なもの欲しがらないでしょうし、ね？」

紡ぎだされた言葉は開け放たれた窓から入ってきた風に溶け込むように消えて

青年の耳には届かない。

「えっ？今なんて言った？」

「・・・さあ？気にしないで、ただの事実確認だから」

少女は再び外の光景に目を向ける。ありふれた街の風景。その中を

動いていく

無数の人影に紛れた男を彼女は見つけ、憐れむような視線を向けた。その手に握られている古本を彼女は知っている。つい先日、馴染みの骨董屋で

手に入れ損なった代物、『不変の書』。

「貴方もどうか・・・“永遠の生”なんて馬鹿なものを望まないで。繰り返す時間に自ら囚われるようなことはしないで」

祈るような声はだが届かない。見えなくなっていく後ろ姿の男にも、すぐ傍に立ち

いつの間にか同じ風景を眺めていた青年にも。

「どうか・・・」

「・・・また逢^あわないことを祈るわ」

「えっ？」

呟かれた言葉に振り返った男にもしかし蒼衣の少女は顔を見せることも返事することも

せず、そのまま男がたった今までいた骨董屋へと吸い込まれるように入ってしまった。

「・・・今の子・・・なんだか前にも会ったことがあるような・・・？」

首をかしげながらも本を抱えた男はそのまま歩いていった。

自覚がないまま永遠に生きることを選択した男は、

同時にこれから歩いていくはずだった未来もまた永久に失った。

保存法 〵 (Refrain) 〵 (後書き)

『不変の書』の設定分かりづらかったらすいません。
要するに（生物なら意識ごとの）時間無限ループです。

あとオリジナルの第4の読姫

”蒼の読姫”ジヴリール・・・

設定とかめちやくちや作ったのに長編が書けず
やむなくこの短編集の主役にしました。

どなたか・・・多少の設定改変は構わないので
ジヴをお嫁にもらってちゃんとした物語を書いていただけないでし
ようか？

もらってくださる方がいるようでしたら
作っておいた設定も公開するつもりでいます。

最後に・・・

重ね重ね無礼なことばかり書いてしまい本当に申し訳ありませんで
した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1850q/>

ジヴリールの書架 断章集

2011年1月19日11時19分発行